

農芸化学と宮澤賢治

私が宮澤賢治を知ったのは、昭和 14 年中学 2 年生のころである。国語の先生が『君らの先輩に宮澤賢治という人がいるが、この人は、きっと後世に名を残す人物となるよ云々』と云われたことを覚えている。その後あまり気にとめていなかったが、4 年生ごろ親友の K から『賢治は俺の親爺と中学同級生で、国語と作文が非常に得意だったそうだ』と聞き、少しずつ賢治を身近な人に感ずるようになっていった。

賢治の生い立ち、作品については、多くの賢治研究家が賢治という花から蜜を運んでくれて、限りなく人口に贈炎されるようになった。しかし、この蜜がどのような土質で育てられたものからなのか、その土質を気にせず味見している感が深い。つまり、盛岡高農で農芸化学を学んだことは誰にも知られているが、賢治の蜜のすばらしい味は、農芸化学という耕土と深い関係があることを強調しているものが少ないよう思う。

当時人口 5 千ほどの花巻で、有力な資産家の長男として生をうけた賢治は、盛岡の中学校に入ってから、家業を継がざるべく中学から上級学校への進学を許されなかつたことを悩み、成績不振とはいえ山野を歩きまわり自然の靈氣を吸って、3・4 年生ころから短歌を作り、ツルゲーネフの作品に耽読。卒業生 88 名中 60 番の成績だったという。かねてから鼻の具合が悪く、約 1 カ月

の入院手術を経て自家の店番をしたり養蚕をしていたようだが、父は止むなく盛岡高農の受験を許すことになる。

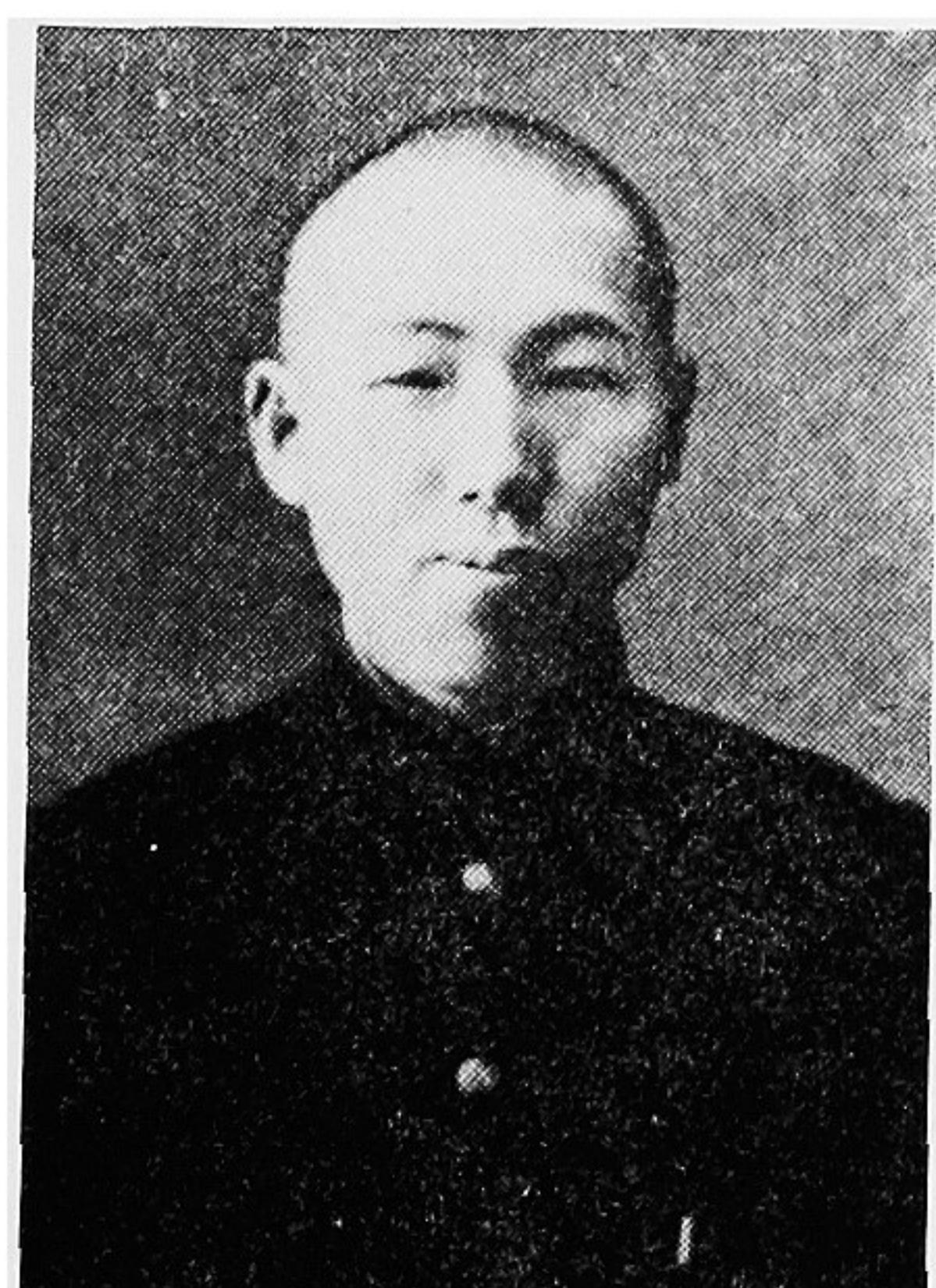
賢治は、この新しい展開に心を弾ませ猛烈な勉強をし、大正 4 年～9 年まで盛岡高農農学科第二部（大正 7 年 4 月に農芸化学科）学生および研究生として在学したのである。中学校の土で目立った地上部の成長がなかつたが、地下部の根が十分育ち、それが盛岡高農農芸化学の土に移植されてから、賢治の花苗は、よき師よき友が適切な基肥・追肥となって美事に開花結実を繰り返すようになった。一粒の種子には、その時代における社会の要望が凝縮されているものだというが、賢治は、資産家なるがゆえの宿縁を凝縮させていたように思う。

それが高農で、俳句に造詣の深い友人河本義行（農学科大 8 卒）から、文学も芸術も農林漁業の収穫の上に成立つ二次三次の産物であると、自然隨順の考え方聞く。また、そのころ米国の有名な育種家ルーサー・バーバンクに私淑していた高橋秀松（農学科大 8 卒）から植物学を通しての農村への貢献を、賢治は初めて知ったにちがいない。同じ農芸化学で一級下の保阪嘉内は、トルストイの精神で農村をなんとかしようという考え方を強く持ち、農作業を一つの芸術のように思う世界を作らねばならない。そして、それに農村芸術という言葉を使っている。それぞれの友人から受けた影響は、後年になって“植物医師”等の作品と農民芸術という考えに反映されている。

このように、大なり小なり盛岡高農での友からうけた影響と、農芸化学領域の学問を教えてくれた師への敬慕が、今日の賢治の大きな原動力になっていることは確かである。

賢治は在学中、実験があまり得意でなかつたらしく、天秤の皿に硫酸をつけたり、ガスの元栓をしめ忘れたりして、化学実験は自分の性格にあわないと父に告白している。そして実験室を“忍辱の道場”といっているが、物質の化学平衡と変化については、強烈なものを学びとて学殖を着実に蓄えていったのである。

『俺は身体が頑健でないから、夜の 10 時以降は勉強し



盛岡高農卒業期（3 年生）の
宮澤賢治

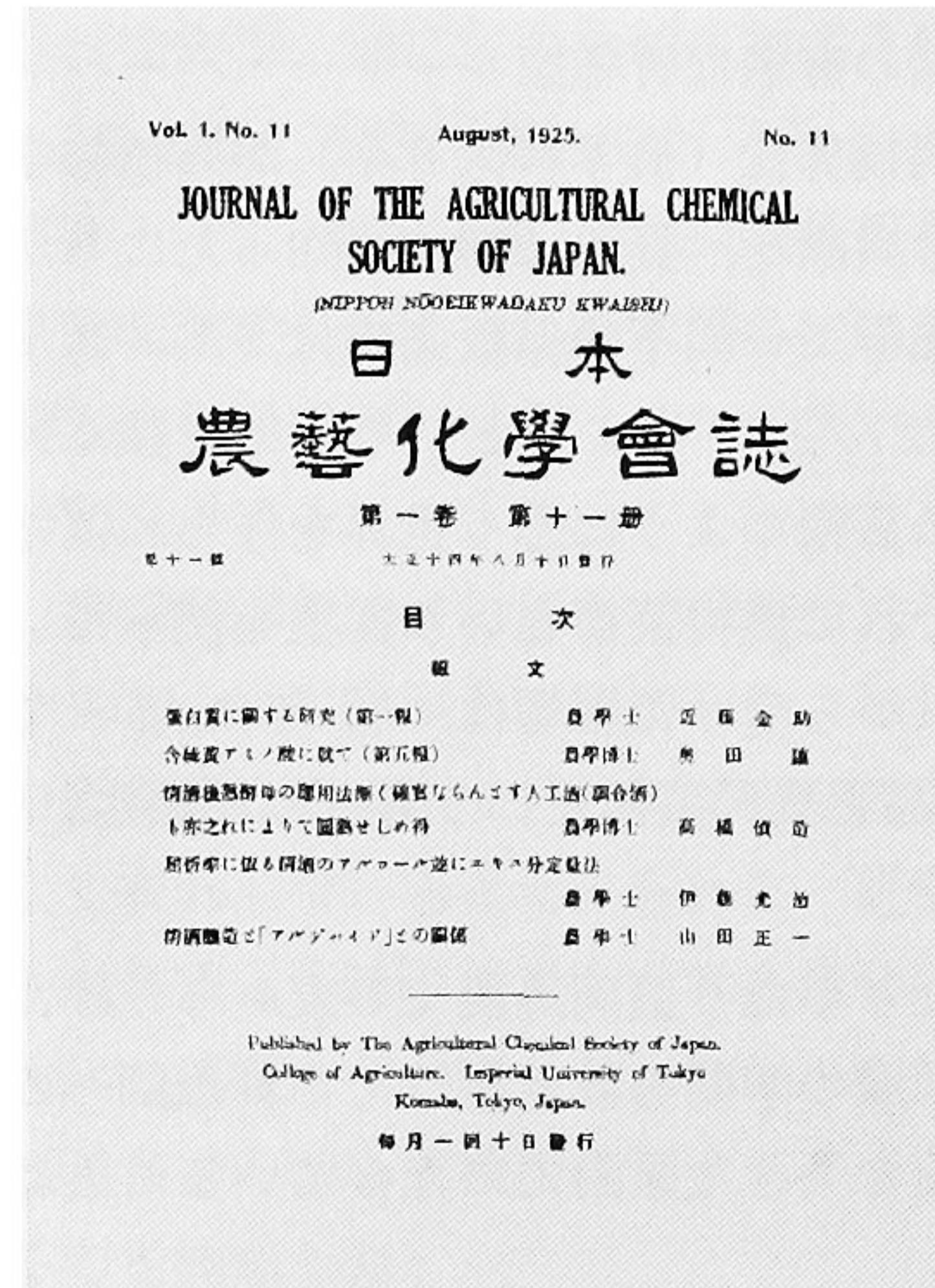
ない』といって、試験期には一層早寝普通起を励行し、始業 30 分前には教室に行き合掌唱経を常としていたらしい。余暇をみつけては、山野を跋渉し、旅に出て、その時の心境を再度味あうべく自分宛に葉書を出す癖があったことは面白い。顧みて微笑み、心の安らぎを感じたことであろう。首席で高農を卒業し、研究者・学者としての進路が約束されていたように察せられたが、同級の成瀬金太郎へ『私は暗い生活をしています。飛びたちもがき悲しんでいる』と手紙を寄せているところをみ

ると、どうも、また上京進学(?)を阻まれたのではないかとも思われる。

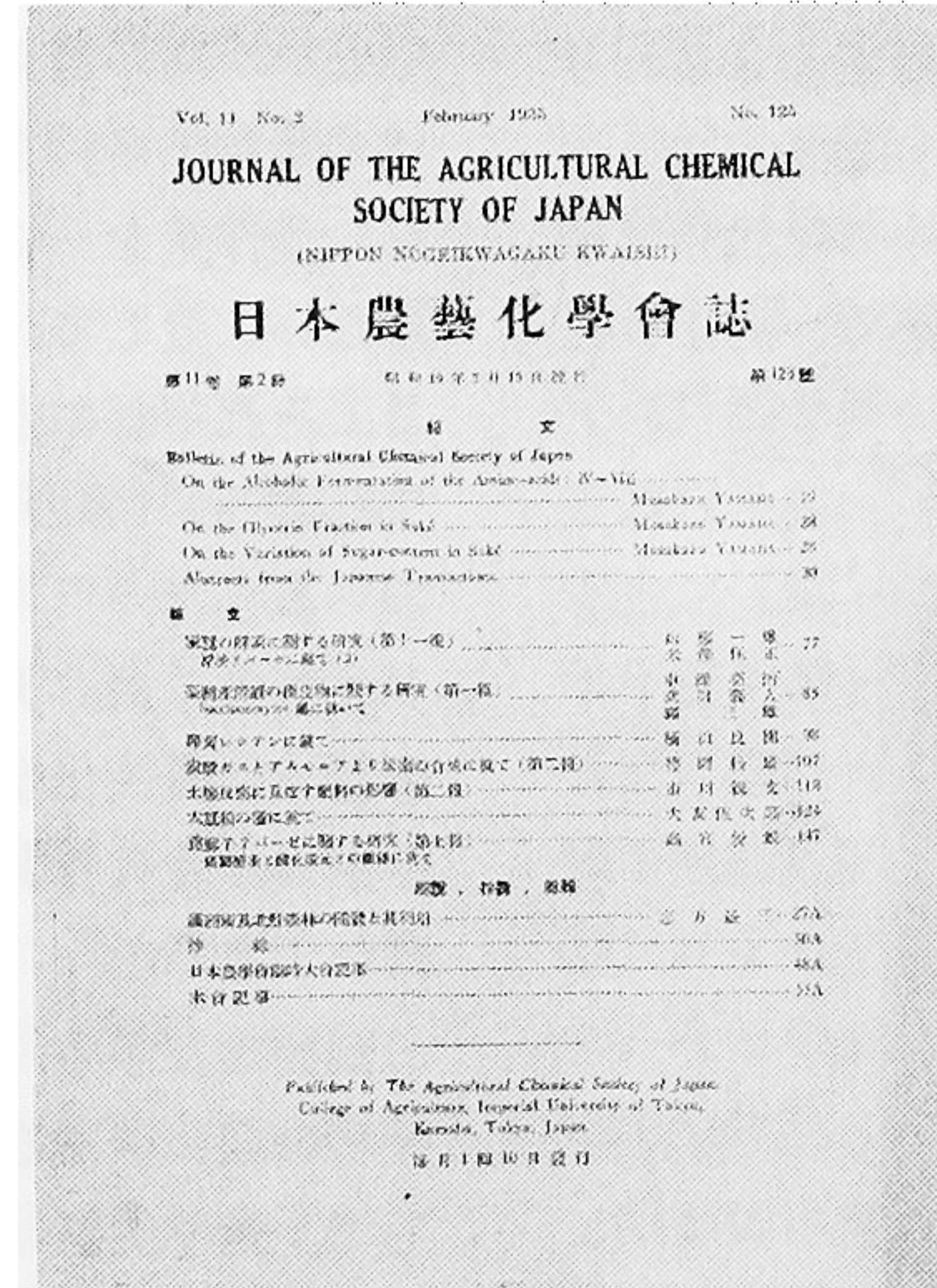
こうして、賢治の昭和 8 年 9 月 21 日までの生涯は、断念によって諦めの程度を高め、新たなる選択の連続であった。修羅の中での類いまれなる感性が、創造者への道に進路変更させて行ったのかも知れない。そして、手垢のつかない言葉で、大自然の翻訳をしてくれたのである。

(晴山信一)

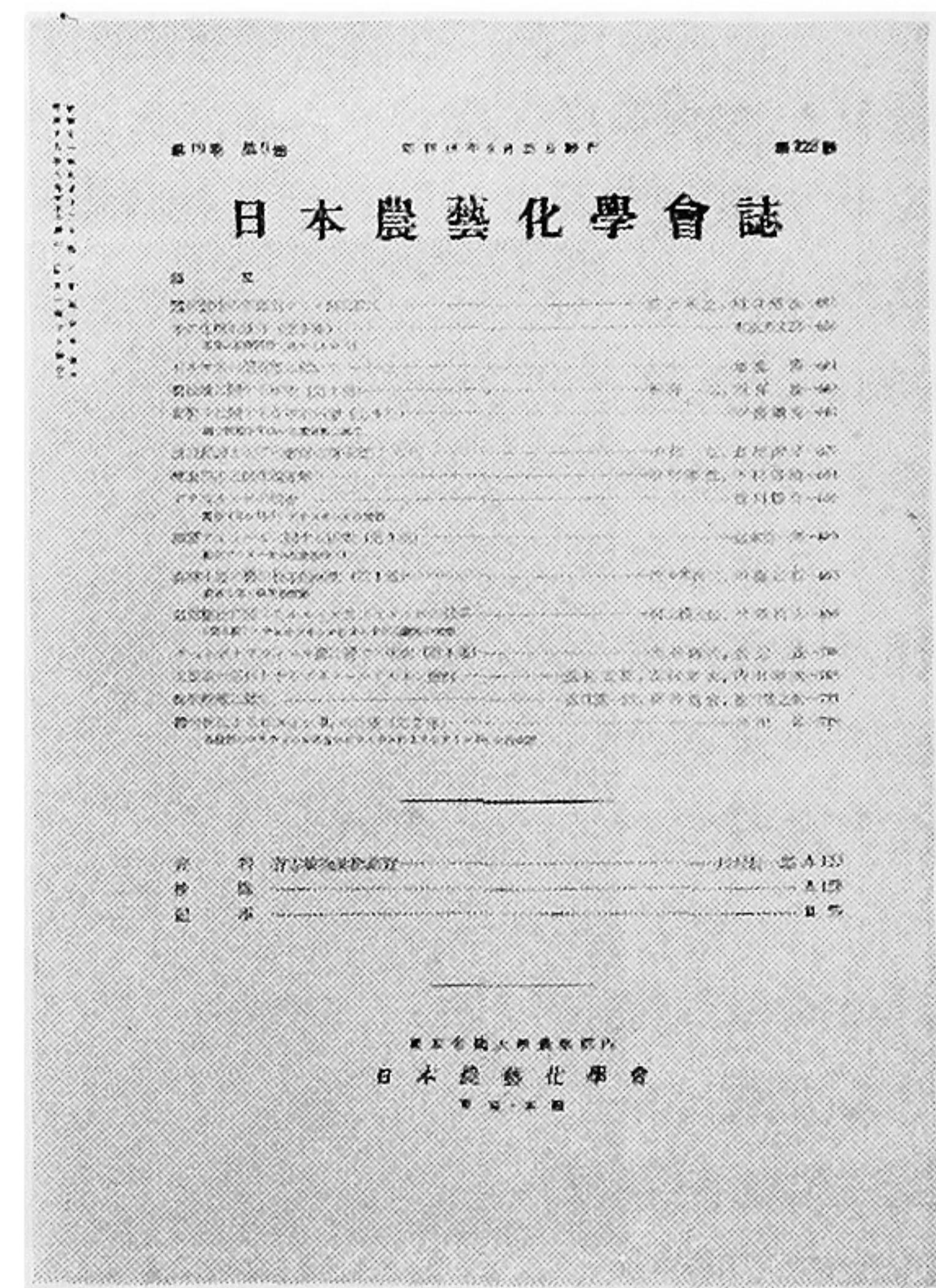
* * * * *



第1巻(1925)～第10巻(1934)まで



第11巻(1935)～第18巻(1942)まで



第19巻(1943)～第20巻(1944)まで